物理学	20	60	293	（ 14）	14.7	8.6
応用物理学	40		299	（ 7）	7.5	
化学	30	30	280	（ 61）	9.3	9.1
動物学	20	20	92	（ 17）	4.6	4.4
植物学	20	20	119	（ 38）	5.9	4.4
地理学	30	30	185	（ 17）	6.2	4.8
地質鉱物学	20	19	88	（ 1）	4.4	7.6
計	約170	269	2,002	（ 264）	7.41	6.7
（農学部）						
農学	45	50	303	（ 35）	6.7	6.4
農業化学	30	30	167	（ 23）	5.6	2.8
農業土木学	25	26	170	（ —）	6.8	6.1
農業機械学	15	17	63	（ —）	4.2	5.0
林学	20	22	144	（ 2）	7.2	3.0
木材工学	15	17	80	（ 2）	5.3	5.0
農村経済学	30	35	433	（ 19）	14.5	12.3
生物化学工学	30	30	250	（ 1）	8.3	2.6
計	約210	227	1,610	（ 82）	7.67	5.8
（体育学部）						
体育学	115	126	1,124	（ 180）	9.8	7.6
健康教育学	50	55	196	（ 33）	3.9	6.3
計	約165	181	1,320	（ 213）	8.0	7.2
総計	約985	1,087	9,444	（1,946）	9.6	8.0

（注）昨年度倍率は志願者を合格者数でわったもの。

抗議の同盟登校

平常授業・自主講座など

「紀元節」に600人

初の建国記念の日二月十一日には、学生をはじめ、国民文化会議、日本キリスト教団などが都内各所で反対集会を開いた。

東京近辺の大学では、教育大六〇〇、東大の駒場・本郷三五〇〇人をはじめ、一橋大、都立大、横国大の学生が、抗議の同盟登校をし、授業・自主講座・討論集会などをもった。

この日、本学では一〇の講義が平常通り行なわれ、また大塚史学会などを中心として高橋磌一氏の「民族・国家・階級」と題する自主講座を開いた。

午後の「紀元節復活反対総決起集会」には四〇〇人が集まった。基調報告のあと、犬丸義一氏（「紀元節のねらい」）、穂積重行氏（「学問、社会、国家」）が講演し、討論、決議を行なった。

集会後、約一五〇人が西神田公園まで地域デモをしたが、途中で東大学生、国民文化会議の集会参加者なども合流した。

一方、九段会館、日比谷野外音楽堂では〝奉祝〟集会が開かれていた。

なおこの日の本学の講義以下のとおり。

大江志乃夫助教授「明治人の建国観」、国分直一講師「国家の起源」、小島晋治講師「清末の農民運動」、穂積重行助教授「西洋史演習」、安田三郎助教授「社会調査概論」、地鉱1岩石鉱物学実習、地鉱2岩石顕微鏡実習、総合農学、農芸化学、解剖学（二クラス）。

トータルな視点を欠く

―曖昧だった2・11への対応―

成果は、ひさびさの共闘

二月十一日、建国記念日は、遂に「国民」に祝われることになった。その日、我々は、そのような「国民」になることを拒絶し、建国記念日に反対する意志を表明するために、そして明治一〇〇年・建国記念日制定＝旧紀元節復活の意図する国民へのイデオロギー支配を打破するために、休日を拒否し同盟登校をした。そして平常授業を追求することによって「何をなすべきか」を自らに問いかけたはずである。

再度、その問いかけを検証してみることは、来年の明治一〇〇年祭によってますます本格的になるであろう体制のイデオロギー支配を拒否する原理を形成するうえで怠ってはならない任務だろう。

十一日の同盟登校は、折からの雪という悪条件にもかかわらず、教育大内においては、昨年来なかなか形成できなかった大衆性をもって行なわれた。大塚史学会学生部会は、はじめは、「平常授業」の要求をかかげて、各学部教授会にはたらきかけていたが、文学部教授会の「学問と政治は別のものであり、教授会としては特に態度を表明しない。授業は教授の自由意志にまかせる」をはじめとして、どの学部も、抗議の「平常授業」を行うということにならなかった。けっきょく平常授業を行なったのは、史学、社会学、地鉱など一〇にとどまった。

我々は、なぜ同盟登校をしたのかと自らに問い返す時、その中にアイマイなものが存するのをみることができる。紀元節復活を体制のイデオロギー支配の全体像としてとらえ自らの実践を決するのではなくして、マス・コミ総動員で話題としている紀元節に対して、何らかの行動をすることが、「社会」に影響を与えるのではないかという淡い期待を持った面はなかったか。それは、教育大における、昨年来の大塚史学会学生部会のシンポジウム、講演会などという一連の活動によりかかった期待でもあった。

極言したきらいがあるが、その期待の中には、神武建国が学問研究の成果に反するデッチあげであるという、その範囲では決して論破されないものもあった。また、政治が学問研究の成果とまったく別な次元で行なわれていることに対する漠然とした不安もあったこともたしかである。しかし、問題は、マス・コミ（一時的に、興味的に、受動的に）によって、触発されたものに止まっていたこと。そして、紀元節の全体像に対抗する自らの創造の原理がアイマイなままであったということだ。大学において、平常授業・自主講座を行うという運動形態が参加しやすいものという把握でしかなかったのではないか。

クラス討論は、去年の学長選挙時を上回る多くのクラスで行なわれた。しかしその中では、学問的成果を破壊するなどの反対ムードが前提としてあり、その一般的反対意志の確認にとどまり、何をなすべきかという方向での討論ができない傾向が強く、同盟登校・全学集会・デモに参加することの確認にとどまった。もちろん、反対意志を行動に転化したことは高く評価しなければならないことはいうまでもない。

しかし、政府は、建国記念日は歴史的真偽が問題なのではない。建国の『心』をしのぶのであるというような説明をし、国家の利益＝国民の利益という形での、海外への再度の帝国主義的膨張（侵略）、大国ナショナリズムを正当化しようとする。きわめてイデオロギー的な内容をもったものなのである。それ故に、我々は、当然このイデオロギー的な紀元節の全体像に対して、どのように対抗するかということを、問題にしなくてはならないのである。

このような体制の支配イデオロギーの具体化によって、我々は加速度的に自らの存在基盤をほり崩されていっているのである。体制に都合のよい秩序・制度をつくるという意図は、大学の再編をもたらし、それによって大学は、社会進歩の砦としての任務を、体制強化の機関として変質させられようとしている。そして、大学自身はそれに何ら主体的対処を示し得ていない。

それ故に、我々は自らの存在の場において平常授業・自主講座などを通して、体制の支配イデオロギーを拒否し、大学の任務を回復（正確には創造かも知れない）しようとしたのであった。大学は権力からみれば、いわば、権力の末端機構である。しかし、大学人（教授・学生）は必ずしもその権力の末端機構としての機能に同意しているわけではない。かといって明確に拒否しているわけでもない。しかし、沈黙は体制支配の貫徹にとって、好都合なのである。

我々は、権力の末端機構としての大学を拒否した。支配イデオロギーを拒否するが故に、大学総体として、社会的に発言することにしたのであった。権力の意志を拒否するが故に、権力の命令である休日を拒否して平常授業を行なおうとしたのである。

現在、我々の受けている授業はその価値を主張するには、相互の関連をぬきにした感の強い不十分なものであるが、その授業に価値を付与しようとするがゆえに、その革新を行なおうとしたのである。授業を革新する可能性を追求することと同時に、革新すべき内容を我々が把握していく必要がある。我々の問題意識を発展させて平常授業に持ち返り革新していくということを独自のサイクルで行なうこと、これが自主講座という視点である。十一日は、授業の革新という視点をもった完全平常授業をあくまでも追求すべきであった。なぜならば、前述のように十一日平常授業を行なうことは、権力の意志の拒否を鮮明に浮び上らすことが出来るからだ。それが特殊十一日になすべき課題であった。また当日の自主講座は、授業の革新というより、平常授業が完全に行ないえなかったための補完物的な傾向が強かったのではなかろうか。

以上のような、平常授業・自主講座の意義があいまいなまま、参加しやすい運動形態（それ自身は重要である）であるというだけの理解しか生み出し得なかった。それは、方針設定の非大衆性に起因するであろう。つまり、先験的に紀元節問題にとりくんできた史学会の方針が大衆的討議もなく、全体的方針になったことである。具体的には教授会への平常授業要求の意味が署名活動、学生大会のなかで確認されなかったこと。

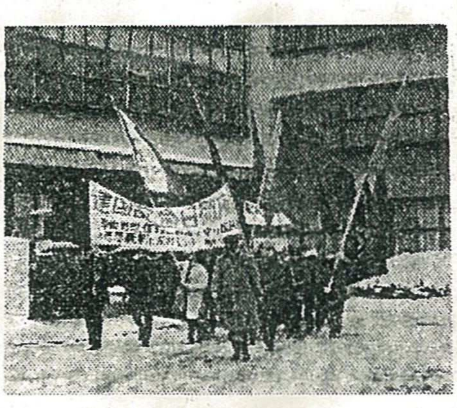
また教授会の拒否後の方針（自主講座で補完する）も非大衆的に設定されたということである。その時点で、参加者一人一人が主体的に自己の実践を決定していくということが、運動の質的な発展にとって重要なのである。

また、紀元節反対実行委員会について見てみるならば、各参加団体の持っている問題意識の普遍化という活動がなされず十一日のカンパニア組織的な性格が強かった。しかし、それによって、史学会や他のサークルと自治会との共闘が達成されたという積極的な面を無視することはできない。

今後のこの運動は、明治一〇〇年という大きな課題につながる。それは、歴史的事実かどうかという問題ではなく、歴史観の対立というまっこうからのイデオロギー的闘争である。これに有効に対処していくには、これまでの運動の総括と共に、何故に大塚史学会学生部会が、先駆的な役割を果し得たのか。また、他のクラスなりサークルはどのようにしたら主体的な運動形成者になりうるのかを総括していかなければならない。

そこで重要なことは、大学に学ぶわれわれが、もう一度自分とその学問を社会の中に投げ返してみることだ。巷では〝学説と国民感情とは別々〟という俗論が常識化しようとしている。大学は今や再び象牙の塔へ追いやられるのか。『明治一〇〇年』の〝民族感情〟はすでに多くの大衆の心をとらえ「田舎者にしてはなかなかよく勉強した」という〝劣等生の優越感〟を蔓延させている。そのまっただ中でこそ、科学はその主権を奪還しなくてはならない。大衆を科学の中にひき込むのではない。科学が大衆の中で自分をみつめ、発言するのだ。そのような科学とは何か。これが問題だ。

（乱）



本学を出発する建国記念日制定反対のデモ